

初任者への期待

2022.12.7

もじもじ先生に続き、もう一人紹介する。SS先生である。2年目の先生である。以前、「機会があれば、自分の授業をビデオに撮って見たほうがいいよ」とアドバイスしたことがあった。そう言われても、やらない人の方が多い。だが、SS先生は、研究授業のたびにビデオを撮っている。教室の後ろのロッカーの上にカメラを固定してスイッチをオンにするだけである。やろうと思えばそう難しいことではない。

SS先生に聞いたことがある。「自分の授業を見てどうだった」彼は、苦痛にゆがんだような表情をした。そのくらい、自分のイメージとは程遠く、見るのが辛かったのだろう。それでも、彼は自分の授業を撮り続けている。

研究授業のたびに私も参観している。彼の授業は、毎回変わっていく。進化していく。授業後の協議では、授業のどこが変わってきているのかを具体的に指摘している。ビデオに撮った自分の授業を見て、私の言っていることがわかると思う。自分の授業を客観的に見ることができるのである。

他にも、教科関係のサークルや研究会に参加するという方法もある。身銭を切るわけである。これをやるには、それ相応のエネルギーがいる。教育関係の書籍を読むというオーソドックスな方法もある。今の若い先生方は、本を読み漁るなどあるのだろうか。もし、次から次へと読むのであれば、まずは、大村はま先生がお勧めである。大村はま先生の本を3冊読めば、教員としてのベース、土台はできるだろう。

教員は、授業を生業としている以上、やはり一番は研究授業である。昔よりは、授業を見ること、見せることが当たり前になってきている。いいことである。いつ誰が見にきてもいいのがプロである。研究授業をやると、いろいろといいことがあるが、本時だけでなく単元全体が意図的・計画的な授業になるという点がよい。本時だけが、急に質の高いものになることなどない。研究授業は本時の1時間かもしれないが、単元という学習のまとまりで授業を構想するようになる。すると、単元全体の授業の質が上がるわけである。これが生徒にとってもよい。授業の質があれば生徒にとっても喜ばしいことである。

記録を取っておくことも重要である。毎時間の板書計画を取っておくような先生もいるが、少なくとも研究授業の記録は取っておくようにしたい。研究授業ファイルや研究授業ノートである。記憶よりも記録である。記録には力がある。記録があれば後で使える。

福島市の場合は、2年目に2年次フォローアップ研修の一環として、研究作品をまとめて出品することになっている。2年目教員であるSS先生も、4月からの取組をまとめる作業に入っている。教員になって1、2年目のアルバムだと考えればよい。アルバムはずっと残る。アルバムは誰でも大切にするだろう。それぞれの初任者が、2年目にどんなアルバムを残せるか楽しみである。